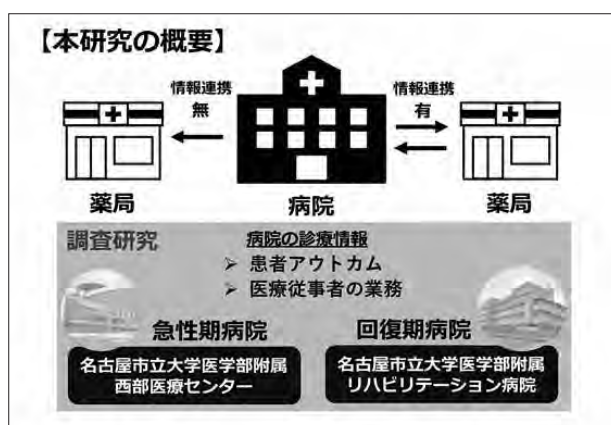


病院と薬局の情報連携が患者アウトカムおよび医療従事者の業務に及ぼす影響の解明

館 知也 ●名古屋市立大学 大学院薬学研究科 教授



本研究の概略図

地域医療貢献のポイント

- ・病院と薬局の間における情報共有媒体を用いた情報連携の実態、および情報連携が患者アウトカムや医療従事者の業務に及ぼす影響を明らかにする。
- ・地域における病院と薬局の間の情報連携のあり方を提言する。

1. 背景と目的

地域包括ケアシステムにおいて、安全かつシームレスな治療を患者に提供するためには、医療従事者間の適切な情報共有が不可欠である。近年、急性期・回復期等の医療施設から介護施設・在宅に至るまで治療・療養の場が多様化しており、薬物療法に関する情報が十分に共有されない場合、薬物治療の質や安全性の低下が懸念される。この課題に対し、薬剤師はトレーシングレポートや薬剤管理サマリーを作成し、退院・転院など治療・療養の場の移行時に施設間で薬学的情報の共有を行っている。先行研究により、病院・薬局間の情報共有媒体の様式や導入状況については一定の検討がなされているものの、これらの媒体を用いた情

報連携が、具体的に患者アウトカムや医療従事者の業務にどのような影響を及ぼすかについては十分に検証されていない。また、急性期病院に比べて回復期病院では、薬剤師の主要業務の多くが診療報酬上算定できない等の理由により病院・薬局間の情報連携が進みにくいという構造的課題も指摘されている。

本研究の目的は、病院（急性期・回復期）と薬局の間における情報共有媒体を用いた情報連携の実態を明らかにするとともに、その情報連携が患者アウトカムおよび医療従事者の業務に及ぼす影響を解明することである。

2. 取り組みの方法

名古屋市立大学医学部附属西部医療センター（急性期病院）および同附属リハビリテーション病院（回復期病院）において、日常診療で取得された診療情報を診療記録から後方視的に収集する。病院と薬局の間の情報連携のうち、病院を起点とする薬局への情報連携が行われた患者を対象とし、薬局側からの情報提供が、患者アウトカムおよび医療従事者の業務に及ぼす影響を評価する。

3. 期待される成果

本研究により、病院と薬局の情報連携の実態や有効性を検証することができれば、エビデンスを基盤とした病院と薬局の間の情報連携のあり方の提言が可能となる。また、本研究から得られる知見は、急性期・回復期等を含む医療連携体制を検討する上で有用な基礎資料となり、診療報酬制度や薬剤師業務の評価のあり方を議論する際にも資することが期待される。